

着いて2人で

「さっきの垂壁と、このカンテのグレードが何で同じなんだ」

と話合った。本に書いてあるグレードなんて、いい加減なものだと思った。それを信用して来てはいけない。自分の腕を信用して、来なければならないのである。

そこから、2ピッチほど簡単なリッチを登り、Dフェースの頭に着いた。もうクタクタである。肉体的にもかなり疲れていたが、極度の緊張のため精神的な疲労のほうが大きかった。でも、心は満たされていた。ついに、登ったのである。村上さんと握手する。水を飲み岩に腰をおろしてくつろいだ。

しばらくDフェースの頭で休んだ後、ザイル、カラビナ、シュリングなどをザックにしまいこみ、5・6のゴルに向った。村上さんがトップである。村上さんは下るスピードが速い。せっかくDフェースを登ったのに、ここで滑落したらいやだと思い、マイペースで降りる。段々、村上さんとの間隔がひらき、Aフェースの頭を回りこむころには、視界から消えてしまった。5、6人のパーティーが懸垂下降しているのが見えた。そこが、下降ルートになっているのだが、待つのがめんどうなので、左側からでも降りられると思い、クライムダウンする。5・6のゴルに立った時、さきほどのパーティーのうち3人が懸垂下降し終っていた。

「クライムダウン出来ますか」

「ええ、左側のほうは、簡単ですよ」

「池の谷乗越から来たんですか」

「いいえDを登ってその帰りです」

と簡単な会話をしてわかれた。Aフェースの基部を回りこんでいると、村上さんが走ってもどってきた。息をきらしている。表情には切迫感がある。

「有村が魚津高から落ちたって」

びっくりした。でも、まだ事態が分っていないので

「でも、大丈夫なんでしょう」

と聞くと

「いや、やばい」

「死ぬかもしれないんですか」

無言で村上さんがうなずく。そこから先は、よく憶えていない。ただ、ひたすら走った。

「なんで魚津高なんかから落ちたんだ」

とつぶやきながら。

小さな雪溪のむこうに人だかりが出来ていた。走りこんでみると、有村の変りはてた姿があった。

「なんで魚津高なんかから落ちたんだ」

と喜多山に聞くと

「ありません。ただ、ランニングビレーを1つもとってなくて、確保のしようがなくで……」
ふっけようのない怒りと悲しみがわいてきた。眼前では、誰だか分らないが、人工呼吸と心臓マッサージをしている。(後で、慶応大医学部のパーティーの人達であることを知った)有村の顔の半分にはガーゼがかけられ、下半身はシュラフにくるまれている。顔色が少し青くなっており、歯肉がすべて折れ、口の中が血だらけになっているのが見えた。ピクリとも動かない。心臓マッサージを行なう際、心臓を圧迫する時だけ

「ふー」

と口の中から息が出る。喜多山が

「喜した時は、『うー』と、うなっていました。しばらくすると、『痛てえな、馬鹿やろう』と暴れました。1時間ぐらいたって、心臓の音が弱くなっちゃって、息が止まっちゃって、トランシーバーでヘリを飛ばすように何度もお願いしたんですけど…」

目には涙が浮かんでいた。ただ、呆然として、その言葉を聞いた。立っている気力がなくなり、そこに座りこんで、泣き出してしまった。すると、誰かに肩をたたかれ、現場からすこし離れたところに連れていかれた。白いヘルメットに、紺の服を身につけている。

「計画書を見せてくれ」

ザックから取り出して提出すると、有村の現住所、帰省先、留守連絡先をチェックしながら、トランシーバーでどこかに連絡している。最初は、なんだかよく分からなかったが、しばらくして、富山県雪山岳救助隊の人であることが分った。

それが終わり、また、座りこんでいると、もう1人の救助隊の人に肩をたたかれ

「リーダーだろう。おまえがしっかりしなくてどうする」

と言われた。リーダーは有村だが、今はサブリーダーである自分がしっかりしなければならない。村上さんが

「俺、テント撤収してくるよ」

と声をかけ、熊の岩のほうに走っていった。喜多山はシュラフにくるまっている有村の足をさすっている。

「そうだ、俺もしっかりしなければ」

救助隊の人から

「なにか連絡が入ったなら教えてくれ」

と言われてトランシーバーを渡された。トランシーバーを握りしめながら

「早くヘリ来い、早く医者来い」

と念じていた。救助隊の1人に聞いた。

「ヘリは飛んでるんですか」

「今日は、少しガスがかかっているだろう。100%視界が効かないとヘリは飛ばさないんだ」

「それじゃ、医者はあとどのぐらいで来ますか」

「1時間ぐらいかな」

しかし、それがあとで慰めであることが分った。その時、既に救助隊のほうでは、絶望視していた。そのため、実際には、医者は向かっておらず、救助隊の人にトランシーバーで様態を聞いていただけだったのである。

5時頃、救助隊の1人が近づいてきて

「既に瞳孔が開いている。手の先も冷たくなっている。心臓と呼吸が止まってから1時間以上たっている。これ以上、人工呼吸と心臓マッサージをしても無駄だ。ちょっと来てみな」
有村のすぐそばに座った。有村の目を見ると、眼球の中心にある黒い小さな点が、広がってしまっている。救助隊の人が

「俺の目を見ろ。俺の瞳孔は、小さいだろう」

手を触ってみた。既に冷たくなっていた。心臓に耳をあてた。胸も既に冷たくなっていた。心臓の音は聞こえない。目の前が真っ暗になっていくのがわかった。有村の笑顔をもう見ることは出来ない。山で友が死ぬことが、こんなにつらいとは思わなかった。救助隊の人から

「有村君のためにも、今日手伝ってくれた人の名前を、ひかえておきな」

と言われて、ハッと我に返り、計画書とペンを取り出し、計画書の裏に手伝ってもらったパーティーの代表者の名前を書いてもらった。

「搬送するから手伝ってくれ」

と言われ、ザイル、シュリング、カラビナを渡した。

「今日は、剣沢の出合いまで運ぶからな。明日は、天気良ければヘリを飛ばすが、悪かったら、かついで登るぞ」

救助隊の人が言った。雪溪のところまで搬送したところで、村上さんに

「荷物降ろしちゃうぜ」

と言われ、うなずいた。他のパーティーの人に搬送を变ってもらい、熊の岩に向かった。ガスは既に晴れていた。後立山のほうに雲海が見えた。今の状況が、信じられない。今まで、いったい俺は何をしていたんだ。ただ呆然としながら、撤収をはじめる。昭如山岳会の人となりにテントを張っており、撤収を手伝ってくれている。もうどうでもいいと思いながらパッキングした。ザックに入らないものはサブザックにつめて、ザックにくくりつけた。それでも入らないものは、ビニール袋につめて手に持った。村上さんが有村のザックに荷物をつめ、ザイルを出して搬送出来るようにしている。喜多山もパッキングが終ったらしく、村上さんのところに行って手伝っている。雪溪で作業している2人に近づいて

「俺、先に下ってます」

と言うと

「手伝ってくれよ」

と村上さん。

「でも、1人先の下って、救助隊の人と連絡をとりあったほうが良いでしょう」

「そうだな」

1人で走って下った。背中ザックと、手に持ったビニール袋が重くてしかたがない。でも、
かまわず走って下った。途中で何度か転んだ。手に持っているビニール袋は、ボロボロになった。
パーティーか抜かして、長次郎と剣沢の出会いに着いた。誰もいない。剣沢小屋まで行くこと
にしたのかなと思い、剣沢を走って登ろうとすると、

「氣渡大のかたですか」

と声がかかった。振り向くと、救助隊の1人である。有村は、既に雪溪に埋められていた。そば
に目印のビッケルがささっている。救助隊の人に明日どうするかを聞いた。それと、並木のところ
に連絡を入れるように頼んだ。しばらく2人で話をしていると、村上さんと喜多山が着いた。

4人で有村の上に、さらに雪を乗せてから出発した。既に日は暮れていた。雪溪の寒さのせいか、
ぼんやりと霧がかかっている。4日前はあんなに楽しく、4人でここを下ったのに… 1歩1歩、
歩くごとに、周りの風景とともに自分の心が、暗闇の中に落ち込んでいくのがわかった。

21時20分頃、野営管理所前に到着。喜多山はかなり疲労しており村上さんにまかせて、救助隊
の人と2人で先に来た。そして、明日の詳しい打ち合わせをした。20分ぐらいして、村上さんと
喜多山が着いた。コーヒーと水を飲んで、すぐに剣沢小屋に向った。剣沢で救助隊の人に連絡し
てもらっていたので、小屋には、既に夕食の用意がしてあった。メチャクチャ腹が減っていたの
に、食べようと思っても、のどを通らない。

「明日、天気が悪かったら、かついで登るぞ」

という救助隊の人の言葉を思い出した。無理して飯を食った。明日バテてたまるかと思った。

夕食後、すぐにシュラフに入ったが、なかなか寝つけない。今日のことが夢に思えてならない。
まだ信じられなかった。シュラフにくるまりながら、暗くなった外を、窓ごしにぼんやり見てい
た。ずっと、ぼんやりしていた。しばらくすると、うとうとした。また起きて、ぼんやり外を見
る。今日1日のことを思った。

「うそだよなー」

とつぶやいた。どう考えても信じられない。また、うとうとする。そんなことを繰り返している
と、窓の外が少しずつ白んできた。廊下には、今日剣に向う人達であろうか、小声だが明るい声
がしている。幻想の世界から現実の世界に少しずつひきこまれていく。例えようのない悲しみが
湧き上ってきた。昨日のことではなく、ずっと昔の有村との思い出が、頭の中を通過していつ
た。

8月3日、5時頃起きて朝食をとり、7時前に野営管理所前に向かった。

「昨日は、いろいろとお世話になりました」

とあいさつすると

「今日はヘリ大丈夫だ」

と言われた。ヘリが薬師岳をまわってくるらしく、遅れるそうなので、3人でしばらく待った。救助隊の3人と自分がヘリに乗って有村のところに向かい、そこで遺体を収容、剣沢小屋の前で村上さんと喜多山を拾って、富山に向かうことになっていた。

ヘリを待っている時間が異常に長く感じられた。空を見ると良く晴れている。秋を思わせるほど空気は肌寒い。まわりでは、無邪気にみんなはしゃいでる。3人の空間だけが暗く沈んでいる。喜多山を見ると、剣岳を見ながら涙を浮かべている。横目でちらりと剣を見た。今まで山を見て、つらいと思ったことなど1度もなかった。しかし、青空に人をよせつけないように、悠然とそびえたっている剣を見て、はじめてつらいと思った。なんで山を見るのが、こんなにつらいんだと思った。涙がポロポロとこぼれた。

しばらくして、ヘリの音がした。荷物を持って、ヘリポートに向かう。姿勢を低くしてヘリに乗った。はじめて乗るヘリであった。剣沢をどんどん下っていく。アリのように人が見える。ヘリの中で

「おまえは降りないで乗っとれ。荷物を入れる時、手伝ってくれ」

と言われた。

慎重に長次郎と剣沢の出会いに着陸し、3人がドアを開けて走っていった。有村の遺体をシートにつつま、有村のザックを背負って3人が走りこんできた。荷物を入れるのを手伝い、有村の遺体をそっとヘリの中につんだ。有村の体は既にコチコチに堅くなっているようだった。少し死臭がした。

「ああ、本当に死んでしまったんだな」

と思うと、体に力が入らなくなり、ヘタヘタと座りこんでしまった。剣沢小屋の前で、救助隊の人と入れかわり、村上さんと喜多山が乗ってきた。再び離陸し、富山に向った。良い天気である。富山市内と富山湾がみえた。しだいに山が遠くなり市内が近くなってくる。少しずつ、少しずつ、現実へとひきこまれていく。心の中が、また、暗闇の中に落ち込んでいくようであった。

<有村がランニングビレーをとらなかった理由の考察>

有村がランニングビレーをとらなかった理由について少し考えてみたい。やはり、一番大きな理由は、魚津高ルートに登る前に中大ルートを登っていたせいであろう。中大ルートのグレードは4級プラスである。それに比べて、魚津高ルートは3級プラスである。岩登りのグレードは1級から6級まであり、数が大きくなるほど難しくなる。そして、その1級間の難しさはかなり開きがある。つまり、3級よりも4級のほうが断然難しいのである。魚津高ルートの前に、有村は中大ルートを登っている。そして、有村もその日の自分の絶好調さを感じていたにちがいない。喜多山も有村の登る姿を見て

「絶好調でした」

と言っている。中大ルートを難無く登った後で1級グレードの下る魚津高ルートである。これだっ

たら誰だって油断する。冬に氷壁を登った後、安全な尾根で滑落するケースがよくあるが、今回の事故は、それに似ている。中大ルートを難無くのりきったことが、多分、有村を油断させたのであろう。

その他にも幾つかの要因があるように思われる。その1つは、記録文でも述べているように、自分と村上さんの2人でDフェースに向かったという事実である。中大ルートを登り終えて、Dフェースに行くことが無理だとわかった時、有村は絶対悔しさを感じたと思うのである。有村の性格からして

「Dフェースに行けないのなら、いっちょ、今日はランニングビレーを1つもとらないで魚津高ルートを登ってやろう」

そう思いかねない。自分と村上さんは、そこまで考えなかった。1番Dフェースに登りたいと思っていたのは有村だと分かっているのに、有村に対する思いやりも無く、2人で先に登りに行ってしまった。そういう軽薄な行為が、今回の事故の1つの要因になっているような気がする。

2つ目は、今までの岩登りに対する基本的な姿勢にある。自分と有村は2年の時、村上さんとともに剣岳で岩登りの合宿を行なった。そして、その年の文部省が主催する大学山岳部リーダー研修会に参加して、本格的に岩登りをはじめようと決意した。研修会で講師の人が1番強調していたのは

「積極的にハーケンを打て。積極的にランニングビレーをとれ」

ということであった。これは基本である。有村もそのことは十分わかっていたはずである。しかし、そのことを厳しくたたきこまれたのはその時だけであった。つまり、誰もそのことを教えてくれない、というより、教えてくれる人がクラブ内にいなかったのである。その後、有村と一緒に2人で岩登りの技術を高めていった。しかし、その段階で「ランニングビレーを積極的にとる」という基本が欠けていた。難しいところに来て、多分行けるだろうと思い、落ちて大丈夫なように十分なランニングビレーをとらずに登ってしまうことがよくあった。自分でハーケンを打つのがめんどくさい、いつも残置ハーケンに頼っていたのである。そして、そういう態度が普通になっていた。結局、2人で高めてきたのは、純粋に登る技術だけで、落ちた場合を仮定した技術はなかった。登ればよいと考えて、ランニングビレーをとるとか、落ちた時にどうするといったことを考えなかった。そういう岩登りに対する基本的な姿勢に問題があったのである。

その他にも幾つか理由があるにちがいない。しかし、自分に考えられるのは、以上の3つである。今、自責の念にとらわれている。自分は有村の御家族に何と言ったら良いのだろうか。落ちたのはあいつだから、あいつ自身が悪いんだと言ってしまうのは簡単だ。しかし、ランニングビレーをとらなかった原因の中には、有村だけの責任だけでなく、それまで2人で行ってきた山行や当日の自分と村上さんの行動が、からみあっている気がする。ならない。

今後、こういう事故が2度と起こらないように、自分に厳しくなり、後輩にも厳しく指導していきたいと思う。それだけが、今の自分に出来ることのように思えるからである。